

赤字ローカル線から考えたこと

瑞穂市立穂積中学校 3年 裕 悠真

イベント列車、レストラン列車、沿線の風景を楽しむ列車…。

今、日本では、このようないわゆる「観光列車」が大人気で、これらに乗ると地域ごとの文化や自然などを楽しむことができる。

小さい頃から鉄道が好きだった僕は、小学五年生の夏休みの自由研究で、自分の住む岐阜県内のローカル鉄道を調べた。岐阜県には、養老鉄道、樽見鉄道、長良川鉄道、明智鉄道の四つのローカル鉄道があり、僕は、その全ての鉄道に乗るだけではなく、駅員さんや乗客の皆さんにインタビューをした。その結果、これらの鉄道は、営業利益が十分ではなく、経営が難しい状態であることが分かった。

それまで、鉄道は、乗客の支払う運賃のみによって、十分維持されていると思っていたが、県や周辺自治体の税金によって補填されていたり、そもそも、これらの鉄道の出資母体に県や周辺自治体が参加していることに驚いた。つまり、税金がなければ、これらの鉄道は、すでに廃線となり、存在していなかったかもしれないのだ。

当時、インタビューをしたある駅員さんが、「こんなけ自家用車がはやっとるもんだで、『赤字の鉄道なんていらん。』という人もそらおるよ。でも、もし、なくなってみ。遠く離れた学校に学生さんたちは、どうやって通うかね。足腰の悪いお年寄りも、どうやって病院に行くかね。赤字で税金の世話になっとるのは悪いことやとは思うけど、わたしらは、地元の人のために働いとると思っとるよ。」と答えてくれた。

税金というのは、国民みんなから、相当の負担をもって集めたお金だ。ニュースで、日本の収支が赤字であることを聞いたたびに、なんともいえない気持ちになるし、無駄使いがいけないことは当然理解できる。これらのローカル鉄道にまったく関係のない人たちからみたら、赤字路線に税金を使うのは無駄と思うかもしれない。しかし、このようなローカル鉄道だけではなく、自分が知らないところで使われている税金が、他の誰かを助けているという事実を僕たちは忘れてはいけないのではないだろうか。

税金は人と人とのつながりの原点だ。人と人との支え合う命綱だ。僕たちは、税金がどのように集められ、どのように使われているかをしっかりと理解し、関心をもたなければならない。始まりは、小学五年生の夏休みの小さな自由研究だったけど、今となっては、僕に税金の重要性を考えさせてくれた大きな出来事であった。